高館小

主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して～（３年計画の３年次）

校長名　　古　戸　美　登　子

１　研究主題について

本校の教育目標は「たくましく生きる子」である。めざす児童像である「夢や志の実現に向かって学び続ける人間性豊かな子ども」の育成に向けて教育活動に取り組んでいる。

この具現のためには、児童が主体的、創造的に学習に取り組む資質や能力、態度を育てるとともに、積極的に他者と関わりをもち、学び合いながら問題を解決しようとする意欲を高めていく必要がある。

３年にわたり、国語科を中心に、本校における主体的に学び合う子どもの姿について共通理解を図るとともに、児童に問いをもたせるための発問、学びを広げ深めるための学び合いのさせ方、活用につなげるための振り返りについて、授業研究に取り組んできた。

その結果、

(1)　判断のずれを生みだす発問をすることにより、叙述にしっかりと目を向けて考えるようになってきた。それに伴って、どの言葉や文章に着目して考えたのか、根拠をもって説明したり書いたりする児童が増え、 課題に対して児童の主体的に学ぶ意欲が高まった。

(2)　振り返りの際、ワークシートを活用して分かったことを明確化させたり、児童に活用場面を想定させたりすることで、次の学習への意欲につながった。

一方で

(1)　意見交流に留めず、児童同士がより深い学び合いにつながるような工夫が必要である。

(2)　問いを正確に読み取らせたり、自分の考えを簡潔に書かせたり表現させたりするための工夫が必要である。

(3)　国語科で学んだことを生かして他の文章を読んだり自分の表現に生かして書いたり話したりすることができるようにする必要がある。

という課題が挙げられた。

これらの成果と課題を踏まえ、今年度も、児童が主体的に学び合い、互いの考えを広げ深める授業づくりを目指すとともに、他教科でも学んだことを生かせることができる児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

主体的・対話的で深い学びを実現する授業のあり方を、国語科における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童同士が思いや考えを伝え、学び合う学習活動を工夫することによって、主体的・対話的で深い学びを実現することができる。

４　研究内容

(1) 習得と活用を意識した授業のしかけ

ア　思考の深め方の工夫（判断のずれを生みだす発問の工夫）

イ　学び合いの工夫

ウ　身に付けさせたい内容（言語活動）の明確化と活用場面の設定

５　研究の経過

(1) 授業仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者
７	１	第１回授業研究（６学年）（要請訪問） 国語「『鳥獣戯画』を読む　日本の文化を発信しよう」 教諭　米谷　理沙
１１	２５	第２回授業研究（１学年） 国語「じどう車くらべ」 教諭　磯谷　佳奈子

(2) 一般研修等

月	日	内　　容
６	２９	外国語活動デジタル教科書の活用について 講師　教育指導課副参事　日向端　聖　先生
７	１９	デジタル教科書を活用した提案授業参観 授業者　秋田大学教育文化学部付属小学校 副校長　京野　真樹　先生
８	２２	ソーシャルトレーニング 講師　八戸市子ども支援センター 副参事兼主任指導主事　小林　真由美　先生
８	２３	障害者スポーツ体験（ボッチャ） 講師　Hachinohe　Club　古舘　幸治　さん
９	２８	家庭・地域との連携～SWOT 分析 講師　本校教諭　三浦　匠
１１	１５	「考える」「議論する」道徳の授業について 講師　八戸市立桔梗野小学校 校長　吉田　朝子　先生
１２	１	特別支援学級における個別の教育支援計画・指導計画の作成と活用について 講師　本校教諭　粟津　綾子

６　研究の成果

(1) 判断のずれを生み出す発問をしたり効果的な導入の仕掛けをしたりすることで、主体的に問題を解決しようとする意欲が高まった。

(2) 立場を明確にすることで、自分なりの考えをもって深く考えるようになった。

(3) 活用場面を設定することで、今までの学習を生かしながら自分の力で問題を解決することができるようになってきた。また、単元以外でも活用して学習を進めることができるようになった。

７　研究の課題

(1) 自分の考えをもって互いの考えを交流することはできるようになったが、それを受けて自分なりに考えをより深め広げたり、相手の考えについて意見を述べたりできるようにする必要がある。

(2) イメージはできるが、それを言語化することを苦手に思う児童が多いため、表現力を身に付けさせることが必要である。

（記入者 金田　光子）